

2017 年

国 語 (A)

(時間 50 分)

< 解答を記入するときの注意 >

1. 試験開始のあいずがあるまで開かないこと。
2. 受験番号は解答用紙の定められたところに記入すること。
3. 解答は解答用紙の定められたところに記入すること。
4. 文字はていねいに書くこと。
5. 答案ができあがっても終了のあいずがあるまで着席し、指示にしたがって提出すること。

高 輪 中 学 校

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数に制限がある場合は、句読点や記号も字数に含まれるものとします。

二〇歳の「ぼく」(秋庭樹)は大学進学を機に故郷を離れて二年になる。「ぼく」には「吉谷美鈴」「雨宮達彦」という同じ歳の幼なじみがいる。

美鈴はぼくのように都会には出なかった。隣市にある県立大学の看護学科に進んだのだ。高二の春に、母親が亡くなったのがきっかけになったと思う。美鈴本人は、進路の理由をはっきりとは、ぼくに告げなかった。おそらく、達彦にも。母親を看取り、まだ小学校の低学年だった弟や父親のために遠方への進学を諦め、看護師となるための勉強の傍ら家族の世話もしている。

そんな少女を悪く言う者はいない。秋庭家のお手伝いとして、ぼくの年齢より長く働いているマサ子さんなんて、美鈴の名を口にするたびに、涙目になって褒めちぎっていた。

「今時の若い者はなんて文句、美鈴さんを見ると、とても言えませんよねえ。ほんとに、よくできたお嬢さんですよ。すばらしいですねえ。ほんと、すばらしい。ね、ぼっちゃま、美鈴さんによく伝えといてください。立派だって、みんな褒めてるって」

と、こんな具合だ。近所のおばさん方も学校の教師も、その他もろもろの大人たちも似たような反応だった。

美鈴には何も伝えていない。一言でも伝えようものなら、美鈴が顔を歪めて、心底嫌だと呻くのがわかってからだ。健気で愛らしい少女の役を拒もうと、美鈴は「奥歯を噛みしめ、眼差しを尖らせるだろう。」

「止めてよ、冗談、きついわ。気持ち悪い」

美鈴は健気で愛らしいだけの少女ではなかった。

「あたしね、母さんのことそんなに好きじゃなかった。そりゃあ亡くなったら淋しくもあるけど……どこかで、ほっとしてるとこもあるんだ」

母親の四十九日を終えた翌日、美鈴はそう言った。秘密事を告白している迷いも暗さもない口調だった。達彦はいなかった。

ぼくと美鈴は地元の高校に進んだが、達彦はS市にある県内トップクラスの進学校、聖陵館を受験しあっさり受かり、そのときは寮生活りようをしていた。達彦2みたいな複雑な性格のやつが四六時中他人と一緒にいなくちゃならない暮らしに耐えられるのかと、ぼく（おそらく美鈴も）は案じていたが、達彦は何とかやっっているみたいだ。手紙もメールもこないけれど、あいつが黙しているのはそこそこ上手くいっている証あかしだ……と、ぼくは勝手に解釈していた。

ぼくも美鈴もバス通学をしていた。同じ停留所を使い、ほぼ同時刻のバスに乗る。そして、帰り道、3三差路で別れるまでの五分あまりを並んであるくのが常だった。

その五分で4とりとめの話をするのも常だった。ただ、四十九日の翌日の美鈴の話は、いつもより重かった。

「母さん、支配欲の強い人だったからね。何でも自分の思うようにしたいって、そんなタイプ。子どもを自分の付属品みたいに考えるところあったしね」

「そうなんだ」

ぼくの記憶の中では、美鈴の母親は痩せて暗い眼をして、咳せきだの熱だの関節の痛みだのと、いつも身体の不調を訴えている人だった。微笑ほほえむと美しい人でもあった。

「たちちゃんが、よく、親にいらついでたでしょ。あたしは、親に当たるの止めなよ、みつともないなんてエラソーなこと言っただけさ、ほんとは、たちちゃんの気持ちわかる気がして、そうだよなあなんて頷うなずいてたんだよ。心の中ではね。あたしだって、母さんが病気でなかったら、むちゃくちゃ喧嘩けんかしてたと思うもの。母さん、最後の一年ぐらいは、自分の身体のことしか言わなくなって……。あたしたちのことまで気が回らなくなってたのね。それがすごく楽だった。自由になれた気がした。そんな気持ちになるのが心苦しくて、あたし……それで、5みたいな気持ちで母さんに優しくしてたんだ」

「うん」

ぼくは頷いた。

我ながら間抜けな反応だ。

馬鹿、頷く場面じゃないだろうと、胸の内で自分を叱しかる。

「父さんね、根っから優しい人で、あたしに謝ってばかりいるの。家族のためにおまえを犠牲にしたなんて言うの。ぼつかみたいでしょ。ほんと、大人ってどうしてあっちもこっちも見当違いのことばっか言うんだらうね」

美鈴はぼくの間抜けな反応に気を悪くする風もなく、話し続けた。ぼくの気の利きかない受け答えには慣れっこになって

いるのだ。

「けど、けっこう快感なんだよね」

「快感？ 何が」

ふふつと美鈴は笑った。艶やかな笑顔だった。そのくせ、僅かに下卑てもいた。不思議な笑みだ。美鈴がこんな笑み方を知っているなんて意外だった。一瞬、息が詰まるほど意外だった。

「父さんも弟もあたしに頭が上らないんだよ。すごく気を遣ってる。弟なんか、『お姉ちゃんの言うこときかないと、お姉ちゃんまでいなくなっちゃうからね』なんて脅すと、すごい素直になって何でも言うこときくんだよ。父さんはマジであたしに跪いてるって感じだしね。はは、あたし、吉谷家の暴君ってとこかな。ちよつとした独裁者だよ。これが気持ちいいんだよね」

「美鈴」

「……酷いでしょ」

美鈴はぼくを見上げ、また笑った。今度は見慣れた少女の笑みだった。柔らかくて、心細げだ。

「酷いよね。自分でも酷いやつだって感じるもの。あたし……母さんにすごく似てる。母さんの嫌なところに似てるの。あんなに嫌っていたのに、嫌でたまんなかったのに、同じことしてるし言ってる。時々、ぞつとするんだ」

「美鈴、太一のこと可愛がってるじゃないか」

ぼくは美鈴の横顔を覗き込む。これもまた、間抜けな一言かもしれないが、言わずにはおれなかった。

太一は美鈴の弟の名前で、美鈴とそっくりのくりくりした丸い眼をして、ぼくを「いー兄ちゃん」と呼んだ。ぼくには兄貴だけで、弟も妹もないから可愛くて、けっこう本気で遊んだりしていた。

「あくまでおれから見てだけ……美鈴の内側まで見通すなんての、おれには無理だけどさ……。でも、美鈴が太一を可愛がってるぐらいはわかるし、それが偽物じゃないってのもわかるし……。美鈴はたぶん、おじさんや太一に感謝されるのが嫌なんだろ」

ぼそぼそと、ぼくはしゃべる。

「ありがとう」も「感謝してる」も悪い言葉じゃない。汚くもないし尖ってもいない。めったに刃にはならない言詞だ。そうなのだ。言葉は容易に刃に変じる性質を持つ。

不用意な一言、何気ない語りかけ、些細なうわさ話が尖った切っ先となって人を突く。研ぎ澄まされた刃になって斬り

かかる。

美鈴の父親も太一も「ありがとう」を繰り返す。

「おまえのおかげだ、ありがとうな」、「お姉ちゃん、ありがとう」。

⁸ その度に美鈴は傷つく。切っ先に突かれ、刃を受けて、小さな傷を負う。他人からの称賛も同様だろう。美鈴を健気な少女とみなし、昔話に出てくるような孝行娘の枠を押し付けてくる世間もまた、美鈴に斬りかかっているのだ。

美鈴は参ってはいないが、うんざりはしている。もうたくさんだと、叫んでいる。

自分の内に悪意や憎悪がある。支配欲があり卑劣がある。誰も知らなくても、自分自身がわかっている。美鈴はそれらを見据えている。目をそらして、家族の感謝や世間の称賛に身を預けない。健気な少女を演じない。演じた方が、ずっと楽なはずなのに。

「おれは、美鈴は勇敢だと思う」

美鈴の足が止まった。

ぼくを見上げる。⁹ 瞬きしない眼に見つめられて、ぼくはほんの少し顎を引いた。

「いや、なんか……戦ってるって感じで、勇敢だし凛々しいって感じがして……あのきつと、美鈴なら淋しくないさ」

「淋しくないって？」

「おまえさ、中学んときに言ったことあったろ」

美鈴が小さく口を開けた。

中学のとき美鈴は言った。

とりあえず、淋しい大人にならないのが目標。

冗談めかした軽い口調だったけれど、あれは本気の告白だった。

「いっちゃん、あたしね淋しい大人になりたくない。」

美鈴なら大丈夫だ。

¹¹ 誰かと一緒に生きてても、一人であっても自分の淋しさをちゃんと受け止められる。

美鈴がふうつと吐息を漏らした。

「いっちゃん、ずるいよ」

ぼくは眼鏡を押し上げ、美鈴を見返す。

ずるいの意味が、とっさに理解できなかった。

「いつもはもたもたして、的外れなことばかり言ってるのに、ぼんとかっちの急所突くんだもの」

「え？ あつ、そ、そうかな……そんな気はないけど」

「本人が自覚してないから、余計に厄介やっかいだ」

「うん？」

「たっちゃんがそう言ってた。聖陵館に入学する三日ほど前だったかな。けっこうマジな顔で『樹はおれよりずっと厄介なやつなんだ』って『本人が自覚してないから、余計に厄介だ』なんて何度も繰り返してたよ」

「達彦より厄介なやつなんて、いないだろうが」

「たっちゃんに言わせれば、『おれはちゃんと自覚して厄介事を起こしてんだ。いわば、確信犯。樹にはそれ、ないから』だって」

「また、好き放題、言ってるんな。達彦に厄介者呼ばわりされちゃ、もうお仕舞じゃないかよ」

「あははと美鈴が声を上げた。

「じゃあね、ヤツカイくん」

ぼくの背中を二度叩たたき、¹²三差路の交差点を渡っていく。
それっきりだった。

《あさの あつこ『フラワーヘブン』より》

(注) 眈………目尻。

四十九日………人の死後、四九日目。また、その日に行う法要。

三差路………本来は「三叉路」と書く。

問 一 —— 1 「止めてよ、冗談、きついよ。気持ち悪い」に込められた気持ちとしてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、世間の人から特別な目で見られていることに対して、うれしいと感じながらも少し恥ずかしく、戸惑う気持ち。

イ、周囲の人たちが自分勝手に想像した印象だけで褒めちぎることをわずらわしく思い、強く不快に感じる気持ち。

ウ、実際の苦勞も知らないで、健気な少女と評価するだけで手を貸してくれない大人たちに、うんざりする気持ち。

エ、自分が当然だと考えている行動を周りの人たちは称賛していることが不自然に感じられ、きまりが悪い気持ち。

問 二 —— 2 「達彦みたいな複雑な性格のやつ」とありますが、このような性格の達彦を樹はどのように評価していますか。文中から五字で抜き出しなさい。

問 三 —— 3・12 「三差路」は何を象徴していると考えられますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、樹が子どもから大人へ成長するところ。

イ、樹と美鈴と達彦の三人が出会ったところ。

ウ、美鈴の心の中にある二面性が表れるところ。

エ、樹と美鈴それぞれの生き方が分かれるところ。

問 四 — 4 「とりとめのない」の文中の意味としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、落ち着かない イ、まとまりのない ウ、際限のない エ、あたりさわりのない

問 五 5 に入る言葉としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、仕返し イ、照れ隠し ウ、恩返し エ、罪滅ぼし

問 六 — 6 「うん」とありますが、ここでの樹の心情の説明としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、美鈴の話すことをすぐに理解するのは難しそうなので、いったん時間をかせようとしている。
イ、本当の気持ちを誰にも言えずに苦しんでいた美鈴が、楽に話せる状況をつくろうとしている。
ウ、美鈴の心の奥底に思いがけずに触れることとなり、とまどいいつも受け止めようとしている。
エ、美鈴の話を受け流すことで、どんなに深刻な話を告白されてもあわてずにいようとしている。

問 七 — 7 「言わずにはおれなかった」とありますが、ここでの樹の心情の説明としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、美鈴は必要以上に強がり悪ぶった告白をしてはいるが、どこかで助けを求めているように感じた。
イ、美鈴の話す内容がどんなに酷いものであっても、幼なじみの苦悩は受け止めてあげたいと感じた。
ウ、美鈴がふだんの様子からは考えられない話をしたため、もっと深い心情を引き出したいと感じた。
エ、美鈴に対して家族は心からの感謝の気持ちでいることを、美鈴に気づかせねばならないと感じた。

問 八 — 8 「その度に美鈴は傷つく」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問 九 — 9 「瞬きしない眼に見つめられて」とありますが、美鈴がこのように見つめた理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、樹から思いもよらない言葉を聞かされたことで、その意図をしつかりと確認しようとしたから。
イ、自分でも気づいてなかった本当の自分の姿を指摘され、驚きのあまりからだがかわばったから。
ウ、自分は真剣に話をしているのに見当ちがいの返答をしてくる樹に対し、いらだちを感じたから。
エ、弱っている自分を何とか慰めようとする樹の優しい心に触れて、続く言葉に興味を持ったから。

問一〇

——10 「淋しい大人になりたくない」とありますが、「淋しい大人」にならないためにはどのようにすればよいと樹は考えていますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、自分の心の中に悪意や卑劣さなどを超えた長所があると受け止める。
- イ、自分の心の中に悪意や卑劣さなどが存在するという事実と向きあう。
- ウ、自分の心の中に悪意や卑劣さなどがあることを妥協たきょうして受け入れる。
- エ、自分の心の中に悪意や卑劣さなどがあることを認めた上で取り除く。

問一一

——11 「美鈴がふうつと吐息を漏らした」とありますが、ここでの美鈴の心情の説明としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、ふだんは他人に対し強い言葉を言わない樹が、過去の美鈴の言葉を使い毅然きぜんと反論したので、意外に感じた。
- イ、自分の心の内を真剣に話したのに、最後まで間の抜けた反応しか返ってこなかったため、疲れが一気に出了た。
- ウ、気の利かない返事をしながら話を聞いていたはずの樹から、急に鋭い指摘をされたので、心の力みをとれた。
- エ、ただ話を聞いてくれるだけでよかったのに、樹は答えるだけでなく見当違いな発言をしたので、啞然あぜんとした。

【以下余白】